

『今月の天候と農作業』

通巻第5555号
5月号
平成25年 5月 3日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	20
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	20	40	40

【概要】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べて晴れの日が多いでしょう。
向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 5月4日(土)～5月10日(金)

期間の中頃まで高気圧に覆われて晴れの日が多く、終わりは気圧の谷や湿った気流の影響で雲が広がりやすいでしょう。(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、低い確率60%です。

<2週目の予報> 5月11日(土)～5月17日(金)

天気は、数日の周期で変わりますが、平年に比べて晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

<3週目から4週目の予報> 5月18日(土)～5月31日(金)

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

本年産は移植後の低温害もほとんどなく、全体的に順調に生育しています。

1 水管理

分けつが株当たり20本程度になったら、「中干し」を行います。落水は5～7日で、軽く足跡が付く程度とします。中干しは、無効茎抑制や根の健全化、倒伏軽減等に効果があるので、必ず行いましょう。中干し後は間断かん水に努めます。

2 病害虫対策

気温が上がり、葉色の濃い水田ではいもち病が発生しやすくなります。田植え時に箱施薬剤を施用していない場合は特に注意が必要で、発生を確認したら早めに防除します。

3 穂肥

5月下旬から6月上旬にかけて穂肥時期となります。コシヒカリは倒伏しやすいので、幼穂長が1匁になったのを確認し、葉色を考慮して施肥します。なお、田植時に基肥・追肥を同時施肥したほ場では必要ありません。

◆ 普通期水稲

1 田植えの時期と準備

標高が高く冷涼な地域を除き、「ヒノヒカリ」を早植すると出穂期も早まり、高温障害による白未熟粒で、品質が低下しやすくなります。このため地域の田植え日の基準をもとに、6月20日以降の田植えとなるよう、育苗作業を始めます。その他の品種も収穫作業の分散等を考慮して、播種や田植時期を決めます。

2 土づくり

ヒノヒカリの白未熟粒発生を軽減するには、土づくりによる根の健全化で稲体を丈夫にすることも重要です。有機質やケイ酸資材の施用や、深耕での十分な作土層確保を行いましょう。

3 種子消毒と浸種

塩水選後、「シנגレセンチュウ」や「馬鹿苗病」等防除のため種子消毒を行います。

籾に気泡が付いていると消毒効果が低下するので、種子籾を入れた網袋

を揺するなどして気泡を抜きましょう。

ヒノヒカリの浸種は、芽揃いを良くするため、水温15℃以下で7日程度と、低い水温で十分行います。水量不足等で水温が上がらないよう注意します。

4 播種後の管理

普通期水稻の育苗期間は高温多湿になりやすいため、白カビや苗いもちが発生しやすくなります。特に出芽から緑化期は高温に注意し換気に努めます。

5 田植え

田植えが始まった中山間地は冷水田も多く、葉いもちも発生しやすい環境なので、箱施薬を行い田植えしましょう。

つけ苗はいもち病が発生しやすいので、補植が終わったら余り苗はすぐに処分します。

◆ 麦類

今年の生育は平年より7～10日程早く進んでいます。ほ場毎によく観察して適期に収穫します。

1 収穫作業

成熟期の目安は穂首が黄化し穀粒からも緑色が抜け、爪を立てるとロウくらいの硬さになった頃です。コンバイン収穫時期はその数日後（水分30%以下）とします。

出穂後、早い時期に倒伏したところは、カビや稔実不良で品質が悪くなっている場合もあるため、事前に穂を確認して刈分けを行いましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 収穫後半のハウス内の管理

促成・半促成栽培のきゅうり、ピーマン等の果菜類は収穫後期となります。気温の上昇とともに、ハウス内の温度も高くなるため、かん水量を増やしていきませんが、それに併せてハウス内湿度が高くなるなど、ハウス内の環境が不良となり病害の発生にもつながりますので、整枝、摘葉等による残査はハウス外に持出し、ハウス内を清潔にするとともに、ハウス内の

温湿度を下げるため、妻面サイドを開放するなど、積極的な換気に務めましょう。また、収穫した果実は直射光線を避け、風通しの良い所に置き早めに出荷するなど品質保持に務めましょう。

◆ 収穫末期の害虫対策

栽培終了となるほ場においては、ウイルス媒介害虫であるスリップス類、コナジラミ類のハウス外への飛散を防止し、生息密度を下げるため、収穫終了後に10日以上ハウスの蒸し込みを行った後、残渣を持ち出すようにしましょう。

◆ きゅうり

気温も高く果実の肥大が促進されるため、収穫遅れのないよう適期収穫を行いましょう。また、果実肥大とともに葉からの蒸散量も多くなり、水分不足による草勢低下やハウス内乾燥による先細り果や曲り果等が発生しやすくなりますので、内張カーテンを利用した遮光やハウス内の湿度の確保をおこなうとともに、かん水や追肥による草勢維持に務めましょう。かん水・追肥の目安として、かん水量は1株当たり2～3ℓ/日程度で、追肥量は10㎡当たりチッソ成分で0.2kg/日程度とします。着果数が多く肥大の悪い場合は葉面散布も効果的です。また、ハウス内の乾燥が激しい場合は、通路等への散水によりハウス内湿度を適度に保つなど生育環境の改善が必要となります。

◆ ピーマン

茎葉が繁茂し、光線の透過不足等により白果の発生や赤果の発生が多くなります。また、成り疲れや着果の多いところでは樹への負担も大きく草勢の低下から、うどんこ病が発生しやすくなりますので、適期収穫に心掛けるとともに、着果のない中枝や老化枝及び主枝上部の果実への光線を遮っている茎葉の整枝・せん定を行いましょう。また、直射光線による日焼け果や高温による尻腐れ果の発生も多くなりますので、日中の強光線時には内張カーテンにより光線の調節を行います。かん水施肥管理としては、ピーマンの根は乾燥に弱く、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下しますので、こまめなかん水・追肥に心掛けます。目安としてはきゅうりと同様の管理となります。

◆ トマト類

主枝摘心により果実肥大は進みますが、ハウス内の高温は乱形果や着色不良の原因となりますので、ハウス内の温度を下げるための換気の徹底に務めましょう。また、茎葉からの蒸散量も多くなるため、かん水量も増やしていきませんが、一度に多量のかん水はハウス内の湿度を高め、裂果や灰色かび病の発生を助長しますので、少量多回数でのかん水を心掛けましょう。目安としては、1株当たり1～1.5ℓ/日程度のかん水量となります。

◆ イチゴ

二次親株の採苗時期となりますが、炭そ病の発症が疑わしい株については、直ちに廃棄することが蔓延を防ぐこととなりますので、親株は多目に準備しておくことが大切です。また、本ぼにおいてうどんこ病やハダニが発生している場合には、苗に伝搬する恐れがありますので、育苗床を優先した作業手順としましょう。

◆ 夏秋果菜類

中山間地域を中心に、雨よけトマト、露地きゅうり等の定植期となりますが、定植後の活着をスムーズ行うことが、その後の作柄に大きく影響してきますので、定植後1週間はこまめなかん水管理に心掛けましょう。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆ かんしょ

普通栽培の植え付け期です。晴天日に植えると苗がすぐにしおれてしまい、落葉するため活着が遅れます。なるべく曇天日を選ぶことと、どうしても晴天日に植える場合は夕方から植えるようにし、日中の苗のしおれを減らすことで、葉の痛みを防ぎます。また、苗は採苗してすぐ植えるよりも、数日乾燥しないように保管した苗（以下：取り置き苗）の方が発根が早くなるので、取り置き苗を使いましょう。

◆ スイートコーン

上旬にハウスやミニハウス栽培が、中旬より大型トンネル栽培の収穫期を迎えます。収穫期になるとアブラムシ、メイチュウ類の適期防除により商品性向上に努めましょう。また、収穫適期の幅が狭いことと品質低下（食味）しやすい作物なので、早朝収穫の徹底と出荷調整時も品温を上げないよう品質保持に努めましょう。

◆ にら

促成栽培の定植期です。たい肥は完熟したのを使います。火山灰土壌の畑では、定床を軽く鎮圧すると白絹病の発生が少なくなります。また、ネダニの発生が多いほ場では、前作の片付けの際に薬剤防除の徹底や残渣を持ち出した方がよい場合もありますので、発生の程度に応じた対策が必要です。

◆ さといも

中晩生種の普通栽培で、5月に出る芽は、親芋の芽です。2本以上出ているものは、大きい芽を1本残して他はかき取ります。また、ほ場が乾燥すると生育が遅れるので積極的にかん水を行い、生育を促します。

◆ らっきょう

下旬から本格的な収穫期に入ります。降雨後、土壌水分が多いときに収穫すると、腐敗の原因になりますので、晴天が続くときに収穫しましょう。また、ウイルスに感染した株を種球として残さないように注意しましょう。ウイルスに罹病した株は、ひとつひとつの球が小さいことと、球がぴったりとくっつき合って、分けにくいことで区別できます。

◆ たまねぎ

秋播き栽培の晩生種の収穫期に当たります。収穫作業は天気予報に気をつけ、屋内に持ち込むまで晴天が続くときに行いましょう。普通、引き抜いた株は1日ほ場に置いて乾かし、翌日に屋内で葉や根を切って姿を整えます。選果場に持ち込むときは、さらにその翌日になります。

◆ アスパラガス

ハウス半促成栽培の収穫期にあたりますが、上旬までには立茎してくるタバコ大のものを1株当たり5～6本残して成茎とします。収穫量が多くなるため、かん水と追肥により樹勢の維持に努めましょう。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ かんきつ全般

今年の着花量は、樹や地域によりばらつきが見られ、全体としてはある程度の着花が見られます。発芽から開花までの日数が少なかったことから、花器の充実不足となり、生理落果が多くなることが予想されます。着果の少ない樹では、着果の見られない枝を、前年枝の基部から除去しましょう。摘果剤の使用は、生理落果の状況を見ながら慎重に行いましょう。

極早生温州の火山灰土壌でのマルチ栽培では、5月中～下旬がマルチ被覆の時期になります。園地周りから雨水が浸入せず、水はけの良い設置条件を確保し、過乾燥や減酸対策として、かん水施設を設置しましょう。

黒点病の発生源となるせん定枝や枯れ枝は、速やかに処分しましょう。

かんきつ類に被害を及ぼすゴマダラカミキリに寄生するカビを利用した、効果の高い防除資材が開発されています。設置適期が5月下旬から6月上旬です。普及センターやJAに相談してみてください。

◆ 完熟きんかん

結果枝の充実促進のために、窒素主体の葉面散布やたっぷりのかん水を行い、大きな葉をつけることで結果枝の充実促進を図りましょう。

また、5月下旬に発根促進剤を施用することで一番果の結果安定が可能です。具体的な方法について、普及センターやJAに相談してみてください。

◆ マンゴー

5月から6月にかけては、本県産マンゴーの出荷最盛期です。施設内の湿度を下げるのがヤニ果や病害果の発生防止に有効です。ビニルの開閉により、適切な湿度で管理しましょう。

また、巻上げ機の故障等による高温障害がこの時期によく発生していま

す。ハウスの見回りや機械の点検に気を配りましょう。

収穫が終わった施設では、たっぷりとかん水を行い、樹勢回復を図りましょう。

速すぎる剪定は第三新梢や第四新梢の発生を助長し、花芽分化に向けた管理が難しくなります。来年の出荷時期を考えながら適切な時期の剪定を心がけましょう。

2 果樹園全般

草刈りは、樹と草による養分競合を防ぐとともに園内の害虫の密度を低くする効果があります。敷き草も雨による土壌の流亡や夏の高湿・乾燥を和らげ、表層の細根を保護します。草刈りとその後の敷き草を実施しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 夏秋ギク

育苗・定植・摘心・側芽の整理作業や消灯・再電照等の管理については、それぞれの作型に応じて計画的に行ないましょう。「フローラル優香」は系統によって節間の詰まり具合が異なることから、導入している系統に適したジベレリンの散布回数・濃度等を確認し、散布を実施して下さい。ここ最近導入されている「精の一世」については、夏秋の晩生品種なので消灯後は完全シェードの11時間日長で管理します。7月出荷作型は親株で低温に遭遇し、幼若性を獲得している場合があるので、栽培期間中に低温で管理すると開花が遅れる恐れがあります。消灯前は12℃程度、消灯後は18℃程度の夜温を確保し、計画的な出荷を行いましょう。

◆ 秋ギク

採穂用親株の挿し芽は、作型と穂冷蔵の有無でスタート時期が異なりますので、所要日数を計算して計画的に作業を進めて下さい。揃った穂を余裕を持って確保できるように親株床の面積は十分確保しましょう。キクの腋芽は高温で消失しやすくなりますので、腋芽の伸びにくい品種・系統は親株床をできるだけ涼しくし、必要に応じてBA剤を散布するなど腋芽の消失を防ぎましょう。

◆ スイートピー

受粉後45日程度で莢の色が緑色から黄色に変わってきたら採種をおこないません。収穫した莢は風通しの良い日陰で乾燥させ、種子を取りだした後、選別を実施し殺菌剤で消毒後、冷暗所で貯蔵します。日光が直接当たる場所で乾燥させると、発芽率が低下する危険性がありますので注意しましょう。採種が終了したほ場は残さを速やかに搬出し、残渣を十分に腐熟させ、土壌消毒を実施しましょう。

◆ トルコギキョウ・デルフィニウム

継続的に収穫が続きますが、日中の気温が高くなると花首や花穂が徒長して軟弱になったり草姿が乱れるので、遮光やハウス換気を徹底して出来る限り昼温を下げるのが重要です。中山間地域では段階的に播種が行われますが、発芽率を高めるために気温とかん水管理を適切に行いましょう。

◆ ホオズキ

次々に開花して結実しながら伸長を続ける時期になります。間引き・葉かきを行い良品生産に努めましょう。極端な低温や高温では、花粉の発芽不良により実の着きが悪くなるので温度管理に注意します。6月の着色期は防除期間が限られるため、ダニ、アザミウマ、アブラムシ類、うどんこ病等の病虫害防除は5月に定期的に行うことが重要です。マルハナバチの巣箱は日陰を作るなど、涼しい場所に置いて下さい。

◆ シキミ

春芽の伸長から硬化時期になります。特に黒シミ斑点病ならびにサビダニ類はこの時期の防除が重要ですので、確実に実施しましょう。

(中村 広)

畜産

1 家畜

5月は家畜にとって快適な季節となり、増体などの生産性も向上して行く時期ですが、昼間は温度が上がり、湿度も高くなることもありますので、冬場に設置したカーテンや風よけの板等は取り除き、畜舎内の通風を確保しましょう。

また梅雨に入る前に各種病原菌の畜舎内への侵入、増殖を抑え、衛生対策を徹底するために次の項目を確認しましょう。

①踏み込み消毒槽の薬液のこまめな交換

消毒の効果を高めるために、消毒液は毎日交換しましょう。

②畜舎内外の消毒の徹底と定期的な清掃

消石灰を散布する際は、散布場所を先ず清掃し十分な量を散布しましょう。

③農場内への外来者の入場制限

「衛生管理区域」に立ち入らさないための看板等を設置しましょう。

④敷料のこまめな交換

特に子畜房の敷料は常時、乾燥した清潔なものと交換しましょう。

この他にカビ等の発生を防ぐために、飼料タンクの破損等の修繕や湿度が低く風通しの良い場所での飼料の保管に注意するなど本格的な梅雨に入る前に対策を施しましょう。

2 飼料作物

今月は飼料作物のソルガムの播種時期です。イタリアンライグラスの後に播種する場合は残根が多く、また除草剤の効果を高めるために碎土、整地、播種後の鎮圧も十分に行いましょう。

例年、5月から6月にかけて農作業事故の発生が多く見られる時期です。ほ場での農業機械等の操作はもとより、乗用トラクターの自宅と、ほ場の往復時にも運転に細心の注意を払い転倒事故等を防ぎましょう。

(小坂 昭三)

特用作物

◆ 茶

1 摘採と整枝

今年の一歩茶は、平年に比べて7日程度生育が早かったことから、ほとんどの地域で摘採が終了しています。二歩茶を摘採する茶園では、芽揃いを良くするために、一歩茶の摘採7～10日後頃を目途に整枝を実施します。

2 茶園の更新

樹高が高く、枝条が細くなった茶園は更新が必要です。中切りは、一歩茶直後が望ましく、中切り位置は高さ40～50㌢、枝幹の太さ4～5㌢の位置を目安に実施します。また、低温被害等の影響で新芽の揃いが悪い園では、浅刈りや深刈り更新等で良質茶生産に努めて下さい。

3 病虫害防除と施肥

クワシロカイガラムシの防除を行う場合は、幼虫の初発を確認して2週間後頃が防除適期となりますので、ふ化状況を見ながら、掛けむらのないように丁寧に薬剤を散布しましょう。特に、雄繭が目立ち枝枯れが見られる茶園では、中切りと組み合わせて防除を実施して下さい。

また、チャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ等の害虫や病害に対する防除は、二歩茶萌芽～開葉期に地区基準に準じて実施します。

施肥は、一歩茶摘採前後に速効性の化成肥料を施用して下さい。

4 チャトゲコナジラミの発生に注意

チャトゲコナジラミの発生が懸念されていますので、次の項目に注意して茶園を観察して下さい。

- ①成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。
- ②茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③摘採袋や生葉コンテナの周囲を観察する。

なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡して下さい。

(佐藤 邦彦)

◆ しいたけ

1 選別

乾しいたけは、規格表を参考に選別し、商品価値を高めて販売します。

特に3号以下のものや規格外品は、絶対に混ぜないように必ず十分な選別を行いましょう。

保管は、湿気や害虫を防止するため、専用箱を用いて十分に密封し、湿度の低い冷暗所に保管します。

2 本伏せ

今の時期は、急な温度上昇が考えられますので、ほだ木の温度・湿度の管理に注意が必要です。仮伏せ中のほだ木は、しいたけ菌の活着が確認でき次第、排水や風通しのよい場所に組み替えます。

裸地伏せでは、直射日光による高温や乾燥を防ぐため、笠木を厚さ30号以上施します。

林内伏せでは、下刈や整理伐により風通しを良くし、庇陰が不足する場合は笠木等で補います。

3 ほだ場管理

梅雨入り前に、防風ネット等の除去を行うとともに、ほだ場とその周辺の雑木雑草を刈り払うなどして、通風を良くします。また、倒れたほた木等の整理を行い、害菌の発生に注意します。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、わき芽除去、心止、収穫、乾燥等多くの作業が重なりますので、計画的に作業を行いましょう。

1 中葉下位着位（旧下葉）は取り遅れがない様、心止までに収穫し、それ以降の着位は、適熟葉収穫に努めましょう。

2 わき芽抑制剤は、わき芽の大きさと天候に注意し、使用方法を守って散布しましょう。また、農薬を使用した際には、野帳・使用実績票へ記入しましょう。

3 心止は、地力や樹勢を考慮して時期（標準作柄は、花軸が伸びた頃）、深さを調整し行いましょう。

空洞病等の病害予防の観点から必ず晴天日に行い、曇雨天が続くときは仮止を行い、天気の回復を待って止め直しましょう。病虫害を防止する為、心止後の花軸部は、除去したわき芽と同様にほ地外に持ち出し適正に処理

しましょう。

4 えき病、赤星病等の防除対策として、排水溝の完備を中心に、効果的な農薬防除による対策に努めましょう。

5 異物混入防止のため、ほ地のマルチ片の回収を行い、収穫の際には、マルチ片の混入に注意しましょう。

6 異臭・虫害防止のため、乾燥前に乾燥室の点検を行い、作業場・貯蔵庫の清掃を行いましょう

(井上 馨)

内容の詳細について

5月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラルト

「青年就農給付金」の概要紹介

農業を始めたい人応援

農業を始めたいと考えながらも、「所得の確保」「技術の習得」等に関する悩みや不安を抱えている方は多いのではないのでしょうか。

そのような就農時の悩み・不安を解消し、安心して農業を始めたいだけ、就農に向けた準備段階から就農初期段階までを総合的にサポートするため、国が平成24年度に創設した制度が「青年就農給付金」です。

青年就農給付金は、就農意欲の喚起と就農後の定着を促進するため、就農前の研修期間と経営が不安定な就農直後の所得を確保するために、規定の給付金を給付し支援するものです。

青年就農給付金には、2つのタイプがあります。

1つ目は、農業技術や経営ノウハウの習得に必要な研修に専念する就農希望者を支援する「準備型」です。これは、45歳未満で独立・自営就農または農業法人等への雇用就農を目指し、県が認める研修機関・先進農家・先進農業法人で概ね1年以上（年間1,200時間以上）の研修を受ける就農希望者に対し、最長2年間、年間150万円を給付します。

2つ目は、経営リスクを負って新規に就農した者を経営が軌道に乗るまでの期間支援する「経営開始型」です。これは、45歳未満で独立・自営就農（自ら作成した経営開始計画に即して主体的に農業経営を行うこと）した農業経営者に対し、最長5年間、年間150万円を給付します。特例として、夫婦ともに就農する場合は夫婦合わせて225万円、新規就農者が共同で法人を新設し共同経営を行う場合は、それぞれに150万円給付します。

申請する窓口は、準備型は県、経営開始型は市町村になりますが、いずれのタイプについても上記の他に、申請のために満たさなければならない要件、給付金の停止や受け取った給付金の返還が必要となる場合などが規定されています。特に、経営開始型は申請までに揃えなければならない書類なども多く、要件の確認等もありますので、すぐに申請できない場合もあります。

就農を考えられている方は、まずは県や市町村にお問い合わせください。

(地域農業推進課 担い手企画担当)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策 (5月)

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち	並	イネミズゾウムシの成虫が10株当たり5頭以上のほ場、スクミリンゴガイの生息数が多いほ場では粒剤の水面施用を行います。施用に当っては水管理に十分留意し、水深が3 cm程度になるように調整し、少なくとも4日間(薬剤によっては7日間)はかけ流しや落水はしないよう注意します。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	やや少 やや多	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや多 並	巡回調査でのアブラムシの発生がやや多い状況です。アブラムシ類は各種ウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め、早めに防除します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病	やや多 並 やや少	べと病対策として換気をよくし、過湿防止に努めます うどんこ病は乾燥条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 ミナミキイロアザミウマによって媒介される黄化えそ病が、一部の地域で問題となっています。ミナミキイロアザミウマは、施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行います。
	ミナミキイロアザミウマ 黄化えそ病 (MYSV)	並 —	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病	並 やや多	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。罹病した茎葉等は感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともにさらに増殖しやすくなるので、初期防除に努め中～多発ほ場では7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行います。
	アザミウマ類	やや多	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病	並 並	灰色かび病に罹病した茎葉は適宜除去し園外に持ち出すとともに、多発ほ場では治療効果のある薬剤で防除します。 栽培終了時は、黄化葉巻病を媒介するタバココナジラミ類の拡散を防止するため、蒸し込み等により本虫を死滅させた後に残さを処分します。また、ほ場周辺の雑草・野良生えトマトは、病原ウイルスの感染源や本虫の増殖源となるので除草を徹底します。
	タバココナジラミ類 黄化葉巻病 (TYLCV)	並 前年・前々 年と同程度	
果樹全般	果樹カメムシ類	—	ウメやモモなどの結実中の果樹類では、飛来に注意し初期防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 灰色かび病	並 並 —	そうか病、かいよう病に罹病している枝葉は、感染源となるため徹底的に除去します。 灰色かび病の防除適期は落弁期です。また開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となるので注意が必要です。 ミカンハダニは、要防除水準(寄生葉率30%あるいは10葉当り寄生虫数5～10頭)に達したら速やかに防除します。
	ミカンハダニ	並	
茶	炭疽病	やや多	炭疽病の発生がやや多い状況です。一番茶摘採後の基幹防除を徹底します。 カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努めます。 クワシロカイガラムシの薬剤散布量は、成園で10 a 当たり1,000 リットルを目安に、枝幹に十分かかるように丁寧に行います。また、激発園で、ふ化最盛期が一番茶後になる場合は、中切り更新して防除すると有効です。
	カンザワハダニ ハマキ類 チャノキイロアザミウマ ツマグロオオカシカメ クワシロカイガラムシ	やや少 並 やや多 やや多 やや多 並	
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpjn.ne.jp/miyazaki です。</p>			